平成９年度厚生省心身障害研究

「生涯を通じた女性の健康づくりに関する研究」

「若者の避妊法の選択とその情報源について」

（分担研究：女性のリプロダクティブヘルスに関する研究）

分担研究報告書

分担研究者　　北村　邦夫[1)]
研究協力者　　草野いづみ[2)]

要約

日本では避妊の選択肢や情報・サービスの場が少なく、正しい避妊情報を得る機会が少ないといわれてきた。避妊の知識や実行が不十分であれば、当然その結果は「望まない妊娠」や「望まない出産」、「人工妊娠中絶」につながる。これはリプロダクティブ・ヘルスのうえで大きな問題である。

研究では、まず大学生にアンケート調査を実施し、若者たちがどこから避妊の情報を得て、どのように避妊を実行しているのかを調べ、その問題点を探った。その結果わかったことは、避妊の情報源の第一位は雑誌、第二位は学校教育、第三位は友人から、というものであった。そこで、第一位の雑誌の避妊情報の内容について調べた。また、学校教育における避妊の扱いについて性教育の専門家にヒヤリングを行った。

調査の結果、若者が得ている避妊の情報量は少なく、不正確だったり間違った情報も多く、正しい情報へアクセスする権利が保障されていないことがわかった。また、避妊の実行には避妊方法の知識だけでなく、男女の対等な人間関係や十分なコミュニケーションが必要である。避妊を含む性の自己決定力を育てるにはどうしたらいいのか、そのためにはどんな対策が必要なのかを考察した。

見出し語：避妊の選択肢、効果の低い避妊法、低用量ピル、避妊情報、性教育、性の自己決定力

はじめに

わが国では避妊の第一選択肢は「コンドーム」であり、二番目に選択されているのが「腟外射精」や「オギノ式」、「基礎体温法」である。低用量ピルや銅付加ＩＵＤ

1）　社団法人日本家族計画協会クリニック
2）　オフィス・クレッセ

などの確実性の高い避妊法が認可されず、「膣外射精」や「オギノ式」など避妊法にはならない不確実な方法がいまだに多く使用されていることは世界の国々の中でも特筆されるべきものである。また第一選択肢のコンドームも正しく使用されていなかったり、「コンドームと膣外射精」、「コンドームとオギノ式」、「コンドームと基礎体温法」など、よく使われている組み合わせが避妊の失敗の大きな原因となっていることは、昨年度の当研究班の報告やその他の研究においてもすでに指摘されている。

これらの事実は、日本における避妊の選択肢や情報・サービスがいかに貧しいかを示している。この結果は当然「望まない妊娠」や「望まない出産」、「人工妊娠中絶」につながる。人工妊娠中絶の総数が減少するなかで10代の中絶は増加し、年齢層別では20代前半の中絶数が最も多くなっている。つまり未婚で、まだ人生設計ができない年齢での望まない妊娠や中絶が多いということである。これらの原因を探るために、若者の避妊の状況や避妊の情報源についての調査を行った。

研究方法

首都圏の４年制大学の学生１００名を対象に、避妊の知識や実行の状況を聞くアンケート調査を行った。その結果、避妊法の情報源として最も多くあげられていた雑誌の避妊情報の内容を調べた。また、避妊法の情報源として二番目にあげられていた学校の性教育における避妊教育のあり方について、性教育の専門家にヒヤリング調査を実施した。

Ｉ　避妊に関するアンケート調査

若者の避妊の現状を調査するための導入としてアンケート調査を行った。首都圏の私立大学（４年制・共学）の１年生１００人に手配りで実施。性経験や避妊の選択、避妊情報の入手先などを聞いた。回答は無記名で郵送してもらった。このうち回収できたのが５１通（女４０通、男１１通）。アンケート用紙の配布は１９９７年１２月初旬に行い、下旬までに回収した。なお、設問がプライベートな内容を含むため、回答したくない箇所は飛ばして可とした。

［調査結果の概要］：女性ｎ＝４０　男性ｎ＝１１　合計ｎ＝５１

１調査対象の年齢：１８歳～２１歳
２暮らし方：一人暮らし…３７％　　家族と同居…６０％　　無回答…３％
３性経験の有無：あり…女４０％　男３６％
　　なし…女６０％　男６４％
４セックスの開始年齢：女１５～２１歳　平均１７．７歳
　　男１６～１８歳　平均１７．０歳

5．避妊法の知識　（複数回答で知っているものにマルをつける）

避妊法	知識ありの割合
①コンドーム	９８％
②基礎体温法	８６％
③月経周期法（オギノ式）	８０％
④ピル	７８％
⑤膣外射精	６７％
⑥殺精子剤	６５％
⑦ＩＵＤ（子宮内避妊器具）	５５％
⑧ペッサリー	３９％
⑨頸管粘液法	４％
⑩その他	６％

※ここからは性経験がある人（女性ｎ＝１６　男性ｎ＝４　合計ｎ＝２０）の回答

6．性経験のある人の避妊の実行経験　１００％

7．日常的な避妊の実行状況

	女	男
いつも避妊をしている	６９％	７５％
したりしなかったり	３１％	２５％

8．主に用いる避妊器具（複数回答で使ったものにマルをつける）

避妊法	使用経験のある人の割合
①コンドーム	９５％
②膣外射精	３０％
③オギノ式	２０％
④基礎体温	１０％

9．避妊したくてもできない場合の心理や状況、原因は？（記述）

［女］●彼がコンドームをしない方が気持ちがいいと言うとき
●相手がただの遊びと割り切っているとき
●その場の雰囲気が壊れそうなとき
●お互いの気持ちが尊重できず、勝手な行動に出たとき
●面倒臭い

●盛り上がっているとき
●自分が気持ちいいから
●相手に言えない
[男] ●どちらかが快楽を求めるとき、もしくは面倒なとき

１０．避妊の費用の負担

	女	男
主に自分	６％	１００％
主に相手	６９％	0
二人で半々	１９％	0
その他	６％	0

１１．避妊に関するコミュニケーション

	女	男
十分にとれていると思う	５６％	７５％
とれていないと思う	３８％	２５％
無回答	６％	

「とれている」と答えた理由（記述）
[女] ●当然のことだから
●今、妊娠しても中絶するほかないので避妊したいから
●私が（話し合いが必要であると訴え）譲らなかった
[男] ●将来のことを考えているから
●確認（両者の準備）は怠りたくない
「とれていない」と答えた理由
[女] ●話しにくい
●恥ずかしい
●欲望を満たすのも大切なコミュニケーション

１２．コンドームはどのように使っているか

	女	男
セックスのときには必ず使う	５６％	７５％
使ったり使わなかったり	３１％	２５％
その他	１３％	0

「使ったり使わなかったり」と答えた人のうち、その内容は

	女	男
危険日だけ使う	４０％	１００％
そのときの気分	４０％	0
その他	２０％	0

１３．コンドームを使う理由（複数回答であてはまるものにマル）

理由	答えた人の割合
①簡単に買えるから	９０％
②使いやすい	６５％
③エイズやＳＴＤの予防のため	３０％
④からだに害がないから	２５％
⑤確実だから	１０％

１４．コンドームが破損したり、誤った使い方をした経験

あり　５名（２５％）

女４名●破けた（２名）

●途中ではずれそうになった（２名）

男１名●破けた

１５．膣外射精に失敗した経験、失敗しそうになった経験は

あり　１名（５％）

女１名●精子が出るギリギリまで入れていたら、膣の中で少し出てしまった。

※ここからは全員（女性ｎ＝４０　男性ｎ＝１１　合計ｎ＝５１）の回答

１６．膣外射精が、非常に避妊効果が低いということを知っている？

知っている	５７％
知らない	３９％
無回答	４％

１７．膣外射精を避妊法だと思った情報源（複数回答であてはまるものにマル）

①雑誌	４７％
②友人	３９％
③ビデオ	２２％
④漫画	１８％
⑤学校（保健体育の授業など）	１０％
⑥テレビ	８％
⑦映画	６％
⑧親	２％
⑨その他	８％

１８．避妊に関する情報源は？（複数回答であてはまるものにマル）

①雑誌	５３％
②学校（保健体育の教科書など）	２４％
④友人	２０％
⑤本	４％
⑥テレビ	４％
⑦兄弟姉妹	２％
⑦交際の相手	２％
⑦ビデオ	２％
⑦漫画	２％
⑦インターネット	２％

１９．低用量ピルについての認識

低用量ピルの認可が近いと知っている	４９％
知らない	４９％
無回答	２％

２０．ピルの使用について

低用量ピルの認可について知っている人のうち「認可されたらピルを使いたい人」

	女	男
ピルを使いたい	２５％	２０％
ピルは使わない	７０％	８０％
無回答	５％	

「使いたい」人の理由は

	女	男
確実に避妊できるから	８０％	１００％
簡単便利	２０％	0

「使わない」人の理由は

	女	男
副作用が怖い（体に悪い）	６４％	７５％
薬ということに抵抗あり	２１％	
毎日飲むのが面倒	１４％	２５％
その他の理由	エイズやＳＴＤが心配　簡単に手に入らないから 子どもへの影響が心配　くわしい情報を知らないから	

２１．避妊や妊娠中絶に関して正しい知識を得たり、相談できる場所の必要性

必要だと思う	８８％
必要ない	８％
無回答	４％

「必要」な理由（記述）

①中絶に関する知識の乏しい人が多い　１６％
②だれにも相談できずに一人で悩んでいる人は多い　１６％
③望まない妊娠を避けるため　１１％
④親や知人には相談しにくいから　９％
④きちんとした知識をもちたい　９％
⑥自分以外の人の意見を聞いたうえで解決したいから　７％
⑦その他の意見

●社会で性が軽んじられないように
●正しい交際ができる
●命の大切さを知ることができる
●マスコミ情報だけでは当てにならない
●生きている限り避けられない問題だから
●中絶が多いのが問題
●男性にも知識をもって欲しい

「不必要な理由」（記述）

●本で知ることができる
●本人の自覚で十分

●あってもいかないと思う

２２．避妊に関する社会環境や施策、サービスなどについて望むこと（記述）

●避妊に限らずセックスのこと悩んでいる若い子は多いと思う。聞きづらいことなので気軽に相談できる相談所やサービスがあるといいと思う。

●コンドームを買うときに恥ずかしい思いをしないで済むような社会になってほしい。

●性にタブーがあるのが嫌。

●避妊方法を詳しく書いたパンフレットを配って、理解を求める政策が必要。

●性教育に関する講演会などが必要

●男女ともに学校できちんと性教育ついてきちんと教えるべき。

●医学的な基礎知識がきちんともてるように、あらゆるメディアから正確な情報を発信し、受け身の人にも伝わるようにするべき。

●性教育を大学受験の必修科目に入れれば学生もまじめに取り組むと思う。

考察

１．主に用いる避妊法はコンドーム、膣外射精、オギノ式の順

今回調査したのは大学１年生でまだ10代が多く、性経験のある者が男女ともに約４割と思ったより少なかった。性経験のある者のセックスの開始年齢は平均１７歳でこれは高校２～３年生にあたる。性経験のある者の避妊の実行経験は１００％と全員であった。

避妊法の知識については、コンドームを知っている者は９８％でほぼ全員。基礎体温法８６％、オギノ式８０％、ピル７８％、膣外射精６７％と続く。性経験のある者に避妊の実行を聞くと、「いつもしている」が女性で６９％、男性で７５％。残りの３割前後は「したりしなかったり」である。「いつもしている」はほとんどがコンドームによるものであり、「したりしなかったり」は「危険日だけコンドームをつける」など、オギノ式とコンドームの組み合わせによる場合が多いようだ。

主に用いる避妊法は、一位コンドーム、二位膣外射精、三位オギノ式、四位基礎体温法。毎日新聞家族計画世論調査や、他の雑誌等における調査とほぼ同じ結果だ。一位コンドーム、二位膣外射精は不動。不確実で避妊法とはいえない膣外射精に頼っている人が相変わらず多いことを示している。避妊しなくてもできなかったり、不確実な方法に流れてしまう原因を聞くと、「彼がコンドームをしたがらない」「その場の雰囲気がこわれそう」と女性が男性に避妊を要求できない心理状況が語られているのも相変わらずの状況である。また、男性だけでなく女性が「面倒」（コンドームをつけるのが）という声もある。

２．コンドームを使うのは簡単に入手できるから

避妊の費用の負担は男性の１００％が「自分」、女性の６９％が「主に相手」というのは、使う方法がコンドームであるから。男性が使う避妊法であるにもかかわらず、「二人半々」（１９％）や「女性が主に負担」（６％）というケースもある。

避妊に関するコミュニケーションが「とれていないと思う」が男性（２５％）より女性

（３８％）に多いのは、女性にとって避妊が切実に自分の体の問題なのに「相手にいいにくい」人が相変わらず多いことを示している。また、コンドームを「使ったり使わなかったり」が３割もいて、「危険日だけ」とか「そのときの気分」で使うという人が少なくないのは、コンドームを使う動機と使用の知識があいまいなことを示している。例えばエイズ・ＳＴＤ予防のため、という目的が明確であれば、「必ず毎回使う」はずであるし、避妊が目的なら「そのときの気分」で使うというのは矛盾している。

コンドームを使う理由に「簡単に買える」「使いやすい」が多いのは、わが国では避妊の情報・サービス提供を行うクリニックや相談機関などが少なく、そういった場所で避妊器具を入手することができないのも影響していると思われる。そのため、薬局やスーパーで手軽に買えることがコンドーム選択の大きな動機となっていることがわかる。コンドームの破損やはずれそうになった経験があるのは５名。また、膣外射精では１名が失敗している。

３．避妊の情報源は雑誌、学校、友人がベスト３

膣外射精が避妊効果が低いと知っているのは５７％と過半数ながら、「知らない」も３９％もいる。膣外射精を避妊法だと思った情報源は、「雑誌」「友人」「ビデオ」「漫画」の順。ポルノや風俗情報、アダルトビデオなどの影響であることがわかる。

避妊の情報源のベスト３は「雑誌」「学校」「友人」。「学校」が健闘しているのは性教育が普及してきたことを示している。ただ、知識が即実行にはつながらないのが問題だ。低用量ピルについては認可が近いことを知っている人と知らない人が半数ずつ。だが、認可されても「使いたい」は女性の２５％と少数派だ。その理由は「副作用が怖い」など薬への抵抗感がほとんどで、マスメディアの情報にも影響されていることが推測される。
避妊について正しい情報を得たり、相談できる場所を、８８％が「必要」と答え、親や友人や学校以外に相談できる第三者の必要性を訴えている。これは性や避妊に関して適切な情報・サービスがないために一人で悩む若者が多いことを示しているといえる。

Ⅱ　雑誌による避妊情報

避妊法の情報源として最も多くあげられているのが「雑誌」である。今回の大学生対象のアンケートにおいても、昨年度の同研究班の研究において実施した学生および社会人に対するアンケートでも同じ結果がでている（複数回答で１位が「雑誌」で６８％、２位「学校」で５７％、３位が「友人」で３３％の人があげていた。この順位は今回とまったく同じである）。これは最近に始まったことではなく、性や避妊に関する情報を雑誌から得るというのは、１０代２０代ばかりでなく３０代以上の大人においても同様であり、実感的に知られてきたことである。性教育が立ち遅れてきたわが国の「伝統」ともいうべきものであり、いまだに同じ状況が続いていることが調査を通じて改めてわかった。

そこで、若者の避妊に関する最大の情報源となっている「雑誌」の内容はどのようなものであるのかを調べてみた。

調査方法は、「大宅壮一文庫」において、「避妊」をキーワードに１９９５年１月～１９９８年２月までの雑誌記事を検索した。同文庫は一般に販売されている主な雑誌を集め

ている（すべてではない）。

［1］避妊に関する雑誌記事の概要

１９９５年1月～１９９８年2月まで、「避妊」をキーワードに検索してリストに上がってきた雑誌記事は、１９９５年２１件、１９９６年４１件、１９９７年２６件、１９９８年（～2月まで）１３件であったが、そのうち「避妊の方法について取り上げ、避妊法についてわずかなりとも解説してある記事」を条件として見て行くと、該当する記事は、１９９５年１３件、１９９６年6件、１９９７年7件、１９９８年3件であった。

そのうち主な記事の内容を女性誌（女性が主な読者と想定されているもの）、男性誌（男性が主な読者として想定されているもの）に分けてリストすると次のようになる。

①記事タイトル、②掲載誌・年月日・ページ数、③概要の順で列記。

［女性誌］

1．①出産予備軍の心構え。避妊はしっかり、妊娠は楽しく

②Ｈａｎａｋｏ　１９９５年1月1日号　２Ｐ

③基礎体温の測り方、基礎体温曲線、排卵日の推定法、コンドーム、リングについて簡単に解説し、最新避妊情報として低用量ピル、ノルプラント（埋め込み式）について触れている。基礎体温計やさまざまなコンドームの写真も。

2．①正しい避妊法。避妊のウソとホントを見抜かないと失敗する！？

②ＪＵＮＯＮ　１９９５年2月号　１Ｐ

③コンドーム、膣外射精、洗浄法、殺精子剤、オギノ式、ピル、ペッサリーについてそれぞれ簡単に説明。オギノ式の計算式と基礎体温曲線を掲載。

3．①男女共学！「避妊」の悩み、「中絶」の不安Ｑ＆Ａ

②ＭＯＲＥ　１９９５年3月号　８Ｐ

③読者からのＱ＆Ａ形式で、「避妊してといえない」「膣外射精って危ない？」「コンドームのつけ方が不安」など避妊を妨げるメンタル面と知識面の両方について複数の回答者が答える。各避妊法についてもそれぞれ紹介。中絶についての基礎知識のＱ＆Ａもある。

4．①あなたなら飲む？飲まない？　低用量ピル解禁間近か！？

②コスモポリタン　１９９５年9月号　６Ｐ

③ピル体験談、ピルのメカニズムとピルをめぐる世界の状況、日本の認可問題、ピルの副作用、性教育の問題など、ピルをめぐる社会問題を全般的にレポート。

5．①２０代の常識「避妊と中絶」最前線レポート

②Ｗｉｔｈ　１９９５年9月号　５Ｐ

③ピル、コンドーム、基礎体温法、殺精子剤、ＩＵＤ、ペッサリーについてそれぞれ説明。「私たちの場合」として彼と避妊のコミュニケーションをどうとっているかについて読者の女の子の声や、男の子の声も紹介。

6．①カレとあなたのＳＥＸ講座。もう一度おさらい避妊のすべて

②ＭＯＲＥ　１９９５年１０月号　８Ｐ

③妊娠のメカニズム、膣外射精の危険、コンドーム、ＩＵＤ、ゼリー・フィルム、基礎体温、ピルのそれぞれの方法の解説。セーフセックスについて。男の避妊の本音。あなたはどんな避妊が向くかチャート。

７．①女性ならきちんと覚えておきたい。ピルや妊娠検査薬の基礎知識。

②Ｈａｎａｋｏ　１９９５年１１月１６日号　２Ｐ

③ピルの効果・飲み方・副作用、妊娠検査薬、排卵検査薬、基礎体温法についてそれぞれ解説。薬や器具の写真なども掲載。

８．①認可間近？あなたはピルを選びますか？避妊とピルとあなたの関係

②ＭＯＲＥ　１９９６年３月号　８Ｐ

③読者の２０代独身女性への避妊に関するアンケート結果の紹介。低用量ピルの認可問題、ピルの効果・メリット、飲み方、副作用などのＱＡ。ピル体験談、ピルについての専門家の意見、避妊の知識・実行力のテスト。

９．①大人の女の常識講座“避妊と中絶”

②Ｗｉｔｈ　１９９６年８月号　８Ｐ

③ピルについてのＱＡ。コンドームの正しい使い方、基礎体温法、殺精子剤、ＩＵＤ、ペッサリーについて簡単に解説。「最前線の避妊法」として性交後避妊のコラム。妊娠の早期チェックや中絶に関するＱＡ、避妊と二人の関係についての読者体験談も。

１０．①生命を宿す能力があるのは女性だから、避妊法は自分がコントロールできる方法を

②Ｈａｎａｋｏ　１９９７年１月２３日号　１Ｐ

③「一般に行われている避妊法のメリット・デメリット」として、ピル、ペッサリー、ＩＵＤ、殺精子剤、基礎体温法、コンドームの入手法、避妊の仕組みと使用法、長所・短所を一覧表でコンパクトに紹介。

１１．①みんな悩んでる、ちゃんと言えない避妊のこと

②ｎｏｎｎｏ　１９９７年９月５日号　６Ｐ

③「男の子にいいたい！避妊は二人の問題。真剣に考えてほしい」題した読者の手記や男女５００人アンケートから、避妊がきちんと行われていない実態や男女の意識の差、男女双方の声などを紹介。コンドームの正しい使い方や膣外射精の不安、“安全日”について、エイズ、ピルなどの“避妊と体の問題”Ｑ＆Ａ。

１２．①妊娠の不安やもうイヤッ！　拝啓　厚生大臣小泉純一郎殿

②ＭＯＲＥ　１９９７年９月号　５Ｐ

③読者アンケートから避妊の問題点や中絶などについての数字を紹介しながら、望まない妊娠の防止や、低用量ピルの認可の遅れについて小泉厚生大臣に訴える手紙形式。基礎体温やコンドームについて、ピルの作用、副作用、飲み方、エイズ予防とピル、緊急避妊法など「避妊について今、最もホットな情報」のミニ知識を掲載。

１３．①認可にそなえてーピル大切な２０の知識

②ＭＯＲＥ　１９９７年１１月号　３Ｐ

③ピルのメカニズム、飲み方、効用その他２０の疑問に答える。

１４．①９８年認可！の情報も気になる「ピル」ってどんな薬？

②ＬＥＥ　１９９８年1月号　７Ｐ
③日本の避妊法、各国の避妊法を比較し低用量ピル認可に関するプロセスを解説。ピルに関する基礎知識のＱ＆Ａ。ピルの適応や健康チェック、他の薬との飲み合わせやピルを飲む際の注意について。
１５．①ピルについて知りたいこと考えたいこと大情報
②コスモポリタン　１９９８年2月号　８Ｐ
③ピルの歴史、ピル認可の問題点となってきたこと、ピルをめぐる日本の事情、ピルのメカニズム、飲み方、副作用、他の薬との飲み合わせ、ピルを飲める人・飲めない人、ピルを選ぶ前に考えたいこと、ピルに対する意見などを紹介。

［男性誌］
１．①神経質な彼女「絶対の避妊法」は？
②自由時間　１９９５年1月5日・１９日合併号　１Ｐ
③日本人の避妊がコンドーム一辺倒なことをあげ、低用量ピルの必要性を述べる。「安全確実な避妊法ベスト１０！」としてピル、不妊手術、ＩＵＤ、コンドーム、ペッサリー、錠剤、フィルム、ゼリー、基礎体温法、膣外射精の順で一覧表に簡単に紹介。
２．①望まない妊娠をしない正しい避妊法
②ＢＩＧｔｏｍｏｒｒｏｗ　１９９５年5月号　２Ｐ
③コンドーム、ピル、殺精子剤、基礎体温法・オギノ式、パイプカットなどの方法を簡単に紹介。基礎体温曲線、オギノ式の計算表も掲載。「こんな方法は間違い」として膣外射精や「射精直前にコンドーム」「ビデで精子を洗い流す」などを指摘。妊娠検査薬の紹介や中絶についても記述。
３．①エイズ時代のセーフセックス
②週刊宝石　１９９５年7月6日号　３Ｐ
③コンドームを性感染症予防に使ったことのある人が４９％と少ないことを導入にコンドームの破損や脱落例が使用法の誤りによると指摘。正しい使用法について触れる。
４．①ピル解禁でこんなに変わるＳＥＸ革命
②スコラ　１９９５年１１月9日号　４Ｐ
③“ピル解禁”で女性の性意識や行動がどうなるか、３人の女性による座談会と、「そもそもピルってどんなクスリ？」のコラム。
５．①オギノ式からエイズ判定法まで“知らないとコワイ”４２項目。「避妊と性病」の基礎知識
②ＢＯＧｔｏｍｏｒｒｏｗ　１９９６年4月号　３Ｐ
③コンドーム、避妊フィルム、基礎体温法、オギノ式（計算表つき）、ピルの避妊率と方法を簡単に説明。妊娠判定薬や人工中絶の方法も紹介。その他ピルや中絶についてＱ＆Ａが少々。
６．①コンドーム、ピルにＩＵＤ、最も確実で安全な避妊法はどれだ？
②ターザン　１９９７年1月8日・２２日合併号　３Ｐ
③「彼がコンドームをつけるのを嫌がる」という読者からの質問を導入に、避妊のコミ

ュニケーションの重要性を記述。それぞれの避妊法の成功率の一覧表をあげ、コンドームの正しいつけ方、ピル、基礎体温法、ＩＵＤ、ペッサリーのそれぞれの方法について写真や図入りで説明。

７．①ピル解禁でボクたちのＳＥＸライフはどうなる！？

②スコラ　１９９７年８月７日号　２Ｐ

③ピルのメカニズムや飲み方とＳＴＤについて少しだけ触れている。

［２］調査結果

１．情報量

①女性誌の情報量が男性誌の倍以上

雑誌による避妊記事を調べてまずわかるのは、避妊に関する知識を得ることのできる記事はそれほど多くないということである。避妊情報を掲載した記事は女性誌、男性誌合わせて１年間に１０件に達しないか、多くても１０件を少し超える程度。それも女性誌と男性誌とでは女性誌のほうが圧倒的に多くの回数取り上げており、男性誌はその頻度が２分の１以下。しかも女性誌が一回の特集に７～８Ｐを割いて比較的詳しく解説しているのに対して、男性誌では２～３Ｐ程度と、分量もかなり少ない。

②コンドーム情報に偏る男性誌

「避妊」のキーワードで検索できた記事は男性誌の中にはもっと多く、この他１２～３件あるのだが、そのほとんどはコンドームに関するものであり、しかも避妊の知識を得るための情報とはいえないものであった。例えばコンドームのさまざまな種類の紹介や、コンドームをどう携帯しているか、いつ装着するかの実態アンケート、性具としての「活用術」、あるいは「日本製コンドームは薄すぎる？」「コンドームが卵巣ガンを誘発する？」などの記事、またはコンドームとエイズ・ＳＴＤとの関係のみ言及した記事であったため、避妊情報としてはカウントしなかった。

２．内容

①各避妊法の一覧やピル特集

多くの記事は各避妊法それぞれの使用法やメリット・デメリットを一覧で紹介している。「避妊と中絶」を合わせて扱っている記事もわりと多い。または低用量ピル認可間近ということもあり、「ピル」の特集を組んでいるのが多いのも目立つ。

読者に避妊の実態アンケートをとってその結果を掲載しているものがよく見られるが、アンケート結果に共通しているのは次のような点である。「避妊をいつもする」という人が５～６割程度で、「したりしなかったり」が３割以上にのぼること。用いている避妊法の第一位は「コンドーム」だが、第二位が「膣外射精」であること。避妊の失敗の原因が「コンドーム」「膣外射精」「オギノ式」によるものであること。これらは今回や前回の

②効果の低い避妊法への注意

「膣外射精」が効果の低い避妊法なのであてにしないほうがいいことや、コンドームの誤った使い方（最初から使わず射精直前になって使うことや空気を抜かずにつけることな

ど）への警告は男性誌、女性誌を問わず、ほとんどの記事で扱っている。また「膣洗浄」や「月経中のセックス」など、避妊に効果があるという俗説も、ＱＡなどで否定している。しかし、「オギノ式」を相変わらず避妊法の一つとして取り上げている記事が少なくない。「オギノ式」の正しい意味について理解している人はほとんどおらず、妊娠しやすい期間を推測してその時期だけ避妊することをすべて一緒くたにして「オギノ式」と考えている人が多いのが現状であり、そもそも「オギノ式」は避妊法としてはあてにならない方法である。日本人の避妊の失敗の原因で最も多いものの一つが「コンドーム」＋「オギノ式」であるにもかかわらず、「オギノ式」を避妊法として紹介している記事は、上のリスト中の男性誌で２誌、女性誌で１誌あり、カレンダーや計算式を掲載している。女性誌のほとんどの記事は「基礎体温法」は扱っても、「オギノ式」は初めから取り上げていないものが多いのに対して、男性誌では「オギノ式」を扱う割合が高いのが目立つ。

また、避妊効果の問題とは別だが、「ペッサリー」は現実にはほとんど入手できなくなっているにもかかわらず、上のリストでは女性誌で４誌、男性誌で２誌が紹介している。

③間違っている情報。誤解を与える記述

記事の中には、事実と異なる記述やあいまいで誤解されやすい記述もみられる。以下はそれらをピックアップしたものである。

●「昔のピルはホルモン含有量が多かったぶん、効き目も強力、１日くらい間があいても大丈夫だったが、現在は副作用を考慮し、ミニピルと呼ばれる低用量のものが主流」（Ｈａｎａｋｏ '95. 11.16 ）→ミニピルと低用量ピルは異なる。

●「基本はコンドーム……さらに他人任せにしないでもうひとつ、自分でもできることを組み合わせるのも大切。例えば……コンドームと膣外射精など」（Ｈａｎａｋｏ '95.1.1 ）→同時に使うという意味で書いていると思われるが誤解を招きやすいし、どちらも自分でできることにはなっていない。

●「20代未婚女性はコンドームとオギノ式の併用が◎」（ＪＵＮＯＮ'95.2 ）→これは小見出し。まさに最も失敗している避妊パターンを勧めている。

●「（コンドームは）できればオギノ式などほかの避妊法と組み合わせるべきです」（ＢＩＧｔｏｍｏｒｒｏｗ'96.4 ）→これも「コンドーム＋オギノ式」という失敗パターンを勧めている。

●「洗浄法。専門医が膣を広げて念入りに洗浄すれば大丈夫ですが」（ＪＵＮＯＮ '95.2 ）→このあとに「素人がビデで流すくらいでは効果がない」と書いてはあるが、ていねいにやれば避妊になるような誤解を与える。

●「オギノ式。排卵後１２～１６日目に月経が起きるという理論を利用し、基礎体温を測って危険日を割り出す」（ＪＵＮＯＮ'95.2 ）→基礎体温法と混同している。

●「セックスの翌朝に飲んで避妊効果がある、モーニングアフターピルという種類がある」（Ｈａｎａｋｏ'97.1.23）→「性交後72時間以内にホルモン剤を投与する緊急避妊法」が正しい。また日本で一般的に行われておらず、アメリカなどでもコンドーム破損やレイプなど緊急の場合のみ医師の管理下で行うものなのに、簡単にできるような誤解を与える。●「基礎体温を毎日計り、そこから推測される排卵日前後５日間はセックスしないようにする」（Ｈａｎａｋｏ'97.1.23）→基礎体温では排卵が終わって高温期に入っては

じめて排卵日を推定できるもので、低温期は避妊が必要とみなすのに、これでは排卵前にあたかも次の排卵日が予測できるかのように誤解してしまう。

●「（基礎体温は）３か月以上続けて計って排卵日を見つけ、その日を避けてセックスすれば妊娠が避けられる」（ＢＩＧｔｏｍｏｒｒｏｗ'96.4 ）→計れば排卵日がすぐ見つかり、その日だけ避ければ避妊できるかのような誤解を与える。

●「最近のピルには飲むと肌がキレイになるという説も」（スコラ'95.11.9）→何のためにピルを飲むのかがわからなくなってしまう。

●「ピルは……飲みはじめて１か月後くらいから効果が現れるもので」（スコラ'97.8.7 ）→医師の発言として書いてあるが、事実と異なる。

この他、避妊情報ではなく風俗記事だが、コンドームの使い方として、「２枚重ねると膣壁からの刺激に対する感覚を弱めるので持続力を高めることができる」（週刊大衆'97.12.15 ）等の記述があった。コンドームの２枚重ねは「摩擦で破ける原因になる」とメーカー側から注意が出ている。このような風俗記事による情報は他にも多いと推測され、誤った避妊法の情報源になっていると考えられる。

④避妊のコミュニケーションに関する記述

避妊を実行するためには、方法についての知識とともに、相手とのコミュニケーションが欠かせない。とくに女性の場合、相手に避妊を言い出せないことが、避妊の大きな障害となっている。このことを反映してか、女性誌には「避妊と人間関係」について頁数を割き、しっかりと扱っているものが少なくない。

例えば、『ｎｏｎｎｏ』（'97.9.5 ）では、「みんな悩んでいる、ちゃんと言えない避妊のこと－うまく避妊できない心の悩みを読者や男の子に聞いてみた」という避妊特集を組んでいる。そして、「ためらっちゃダメ！男の子たちの“わがままな性的欲求”はこうかわす」（見出し）として、「ピシッといえば意外と協力してくれることが分かったよ」と女の子が避妊について積極的に男の子に働きかけることを勧めている。

その他「避けてはとおれないから、彼と上手に話し合いたい。避妊－私たちの場合は……」（Ｗｉｔｈ'95.9 ）、「避妊と中絶でふたりの関係が見えてくる」（Ｗｉｔｈ'96.8)、「コンドームつけてと言えない、つけるのがイヤから脱皮－愛を深めるセックスのために」（ＭＯＲＥ'95.3 ）、「あなたと彼、こうすれば避妊はうまくいく」（ＭＯＲＥ'95.10）などの見出しからもわかるように、いかに避妊について相手に伝え、上手にコミュニケーションをとるかという問題が、読者の女性の現実に沿いながら取り上げられている。

一方、男性誌ではどうだろうか。女性に比べて男性に切実性が薄いせいか、あるいは避妊の記事全体が各２～３Ｐと短いためか、女性誌のように「避妊と人間関係」の問題を正面から取り上げている記事はみあたらない。ただ、記述としては次のようなものがみられる。「妊娠、中絶は女性だけの問題ではありません。大切な彼女を傷つけないために完璧な避妊を！」（ＢＩＧｔｏｍｏｒｒｏｗ'95.5 ）、「しかし、ちょっと待った。彼氏がコンドームしてくれないからしょうがない、私がピルを飲むわ、というのは何か違う。セックスは二人で楽しむもの、カラダで行う二人のコミュニケーションだ。そのために、それ以前のコミュニケーションはうまくいっているのだろうか……それぞれの避妊法にメリッ

トもデメリットもある。それをよく知ったうえで、二人にいい方法を話し合うのが一番の解決策」（ターザン'97.1.8 ）。

考察

以上のように若者の避妊の主要な情報源となっている雑誌を分析した結果、次のようなことが言えるだろう。まずプラス面としては、避妊特集を組んでいる記事の多くには、現在使用可能な避妊の選択肢が網羅的に紹介されており全体像がつかめること。低用量ピル認可問題など最新情報をキャッチして紹介することには強いこと。また「膣外射精」など効果の低い避妊法に対する警告がなされていること。知識面だけでなく、避妊と男女の関係性・コミュニケーションの問題も取り上げられていること。

一方、マイナス面としては、まず掲載頻度と情報量が多いとはいえないこと。とくに男性誌の情報量が少ない。読者はたまたま自分の買った雑誌にしっかりとした避妊特集が組まれていればよいが、そうでなければ、読む機会がないか、断片的な知識の記事しか読まないであろう。雑誌以外に学校などで基本的な性教育を受ける機会がなければ、必然的に避妊情報はアンケートで第３位の「友人」口コミに頼っているであろうことが推測される。二つ目には、誤った記述や誤解を招くような不正確な記述が少なくないこと。とくに「オギノ式」「基礎体温法」「ピル」についてそれがみられる。

三つ目は、「避妊と人間関係」に関して男性誌の取り組みが弱いこと。コミュニケーションがとれない、避妊に協力的でないというのは、男性の問題である場合が多いので、男性誌こそこの問題にもっとしっかり取り組んでほしいと感じた。

Ⅲ　学校の性教育と避妊～専門家ヒアリングから

昨年度に同研究班の研究において実施したアンケート（学生および社会人）でも、今回のアンケートでも、避妊法の情報源の第二位にあげられていたのが「学校教育」であった。これはここ１０年位のあいだに、性教育を実施する学校が増えてきたことを反映した結果といえる。しかし、性教育を受けたにもかかわらず、それが実際のセックスの場面において有効に避妊するという行動に必ずしもつながっていないことをも示している。

性教育の現状や若者の性をとりまく問題について、性教育を実践する教師および性教育に関心のある教育関係者等の任意の団体である「“人間と性”教育研究協議会」の幹事を務める二人の専門家にヒヤリングを行った。

１．原田瑠美子さんに聞く

原田瑠美子さんは東横学園中学・高等学校教諭。理科担当。女子中学生、高校生を対象に性教育を実施してきた。著書に『十六歳の母』（あいわ出版）『理科だいすきルミコ先生のワクワク授業』（労働教育センター）『少女たちと学ぶセクシュアル・ライツ』（つげ書房新社）などがある。

（1）現在の性教育の普及度と内容は

1992年の学習指導要領の改訂で「性に関する指導」が入って「性教育元年」と呼ばれ、それが追い風となって小学校での性教育が進んだ。中学校高校ではＨＩＶ・エイズに関する教育の必要が迫られ、それによって性教育にはずみがついたともいえる。教育内容は現場の教師に任されており、教科書や副読本の選択や授業内容は学校や教師によってさまざまで幅がある。小学校では生命誕生や第二次性徴に関しては、かなりの教師たちがクリアしている。性交について教えているところも増えてきている。

中学校高校ではエイズについて教える際には感染経路としてのセックスに触れる必要があり、性交についてもかなり語られるようになってきている。小学校では避妊までは教えないが、中学高校では性教育をきちんと行っているところでは、「出産」「性交」「避妊」は三本柱となっている。この三つは性教育で必ず押さえておくべき課題である。人間の性は「生殖の性」だけではない。「触れ合いとしての性」という観点から「性ってなんだろう」と問いかけ、「お互いにいたわりあう心地よい触れ合いの性」を考え、将来自分が性の当事者となったときに「相手を傷つけない、思いやれる関係」ということで避妊のテーマにつなげていく。

「“人間と性”教育研究協議会」のメンバーは全国で約3000名弱。保健体育や理科、家庭科、道徳などの授業のなかで性教育を組み入れている教師が多い。また保健室の養護教諭も多くメンバーに入っており、性教育に熱心な教師が少なくない。ただ、全国的にみれば、性教育をちゃんと実施している学校はまだ多いとはいえない。

（2）親からの性教育のニーズ

巷にあふれている性情報は、大人と同じくらい子どもにも入ってくる。雑誌や漫画やビデオなどから、「性をばかにした扱い」や「なぐさみものにされた性」の情報ばかりが子どもたちにインプットされる。それによって子どもたちに「性ってエッチなもの」「ばかみたいなもの」というネガティブな性イメージがつくられてしまう、と危機感を持つ親が少なくない。

中学生ともなれば、すでに性の当事者となる子どもたちもおり、「援助交際」も現在は自分の子どもが関わっていなくても、直面する可能性はいつでもある。思春期過ぎてからでは遅過ぎる、幼児期から子どもたちにちゃんと性を語っていかなければならない、と考える親が増えてきている。子どもたちが風俗的な性情報に汚染されない前に、健やかな性を育むにはどうしたらいいのかと悩み、親自身が「子どもに性をどう教えていいのかわからない」ととまどっており、現場の教師に教えてほしい、というニーズが高まっていることを感じる。公民館や地域の母親の集まりで性教育の講演に呼ばれることも増えている。

（3）子どもたちの性意識

性教育の授業の最初に、自校の中一の女子生徒たちに、「性についてなんでも聞きたいことを聞いてみて」ということにしている。以前は「男の人の生理は白い血なのですか？」とか「どうして男の人はエッチな本を見るとオチンチンが大きくなるんですか？」などわりと子どもっぽい質問が多かったが、最近では「松葉くずしのやり方は」とか「ア

ナルセックスって何ですか」「なぜ男の人はオチンチンをなめてもらいたがるんですか」など風俗情報から得たような質問が多くなってきた。女の子でも半分以上がアダルトビデオを見ていたり、雑誌などでも性風俗産業的な性情報をたくさん浴びている。

ところが、月経をはじめ自分のからだについての知識を聞くと、基本的なことがわかっていない。女の子も性に対する欲求や関心があるのは当然だが、そのベクトルが別の方向に向いてしまっており、性に関して自分にとって本当に大事な情報を持っていない。そういうアンバランスのなかで、少女たちは中学生、高校生になると当事者として性の問題に直面することになる。ボーイフレンドと性関係を持ったり、妊娠するケースもある。また生徒たちに聞くと、街頭で「援助交際」を大人の男性たちから持ちかけられた、声をかけられた経験のある子はとても多かった。少女雑誌は「援助交際」のすすめ的な記事や、「下半身」だけの情報を掲載して大人の男性に都合のよい少女たちの性意識をつくろうとしている。そのなかに放置されている子どもたちに、大人が正しい性知識を伝える努力なしに自分の体や性についての主体性を持つことを期待しても難しいだろう。

一方で月経に対して「わずらわしい」「うっとうしい」というマイナスイメージを持っている女の子が多い。中学の授業で基礎体温を測らせているが、実際に自分の基礎体温を記録してみると、低温期と高温期に分かれるリズムがわかったり、各人のリズムが顔や体つきが違うように異なることをみて、「おもしろい」「女ってすごいな」というプラスイメージに変わって行く。

従来の性教育は初潮について「赤ちゃんが産める体になってよかったね」と、月経を生殖機能のみに結びつけて語ることが多かったが、実際に人間にとって生殖に結びつく性は一生のあいだのわずかな期間であり、子どもを産まない選択をする人、産めない人もいる。月経の基本は生殖機能だが、人間の性は生殖から離れた側面もあり、月経は子どもを産む産まないにかかわらず女性の体のリズムであり、体調のバロメーターであることを子どもたちに伝えると、より月経をポジティブに自分の問題としてとらえられるようになる。生殖に結びつかない性も重要だということが思春期の初めから認識できて、「性とは何か」「なぜ人間はセックスをするのか」を考え、性を自分の「生き方」問題としてとらえ、その延長に避妊が語られることで、性や避妊のことがより身近な自分の問題として感じられるようになり、性に対するイメージが変わってくる。

（４）性風俗情報と避妊

学校の性教育で避妊を扱う場合、現在ある避妊法それぞれの用い方と効果、問題点などを説明する。コンドームなど可能なものは実物を見せる場合もある。１０代の男女の避妊の状況はやはりお粗末だ。避妊している場合はコンドームが最も多く、次が膣外射精。中高生たちに、「将来自分が避妊をするとしてどんな方法を選びますか」とアンケートをとったら、「コンドーム」「膣外射精」「オギノ式」と答えた子が多かった。これは大人たちと同じ状況といえる。膣外射精が多いのはアダルトビデオの影響（「顔面シャワー」とか）もあるのではないだろうか。

性風俗産業からの性情報ではきちんと避妊しようというメッセージは伝わらない。また、「援助交際」のように男が金を出して女の子とセックスするような状況では、男がちゃん

と避妊することは期待できない。「援助交際」の陰には、多くの望まない妊娠や性感染症の広がりがあることが予想される。実際に、友達がテレクラで知り合った男性とセックスして妊娠してしまって、男性に連絡がとれないという相談を受けたことがある。彼女は「援助交際」で中絶費用を稼ごうかなと言っていたという。自分の性や体を大切にする意識が抜け落ちてしまっている。

高校生の女子生徒にアンケートをとると、クラスの三分の一が「場合によっては自分も『援助交際』をするかもしれない」と答えていた。高校２年生対象のアンケートで、「テレクラに電話した経験」を聞くと、３割以上が「経験あり」と答えている。「援助交際」をしている女の子のタイプは、「将来はいい結婚相手をゲットして楽ちんして生きる」という「玉の輿願望」を持ち、「若いうちは遊ばなくちゃ。稼げるうちに稼ごう」という子が多い。性の知識もあいまいで男まかせ、避妊の主体性にも乏しい。一方、自分の体や性について正しい知識とポジティブな意識を持ち、性や避妊に関して主体性のある子が「援助交際」などでお金と自分の体を引き換えにするということは少ない。

（５）避妊と性の自己決定能力

どんな避妊法があるかという知識を身につけても、それを実際の場面で使えるかどうかは別の問題だ。知識があるのに「避妊できない」あるいは「膣外射精」になってしまうのは、女性が男性に対して避妊を要求できない、対等にセックスや避妊について話し合うことができない関係が原因となる場合が多い。女の子だけでなく男の子にも避妊教育をする必要性とともに、避妊のメカニズムや生理学的な側面だけにとどまらず、相手を傷つけない人間関係のあり方や対等に性や避妊を語り合える関係のつくり方を教えることが非常に重要である。

（６）ピルに関する情報と意識

性教育に携わる教師のあいだでもピルに関しては情報が少なく、正確な知識を持っている人は少ない。避妊を教える場合にも、「経口避妊薬というものがあるが、副作用が強くて日本ではまだ認可されていない。使う人も少ない」というくらいにとどまっている。生徒たちに聞いても、ピルに対するイメージはマスコミや親世代のイメージを反映しており、「副作用が怖い」「使いたくない」という拒否反応が強い。クラスでアンケートをとっても、「認可されたら使う」というのは２～３名だった。

しかし、その後、ピルの歴史や現在の低用量ピルについて説明し、認可されていないために30万人の女性が中高用量ピルを使っていることなどを話すと、生徒たちのピルイメージが変わってくる。ピルのメリット・デメリットをきちんと説明し、避妊の選択肢の一つとして位置づけることで初めて、情報を受け取る側にとってピルが有効な手段として認識される。１０代にとっても低用量ピル認可により、避妊の選択肢が拡大することは幸せなことであり、人によっては非常に役立つ武器になりうると思う。

（７）行政に望むこと

低用量ピルやＩＵＤの認可を含めて避妊の選択肢を増やすこと。女性が用いる避妊法ば

かりでなく、新しい男性の避妊法がもっと開発されてもいい。また現場の教師に避妊やＳＴＤなどに関する情報をオープンに出してほしい。世界の避妊研究の最新情報なども現場の教師に伝えてほしい。また、学校での性教育を進めることはもちろんのこと、１０代の子どもたちが気楽に性や避妊やＳＴＤの相談ができる青少年クリニックのようなものをいろいろな場所につくることを望む。

厚生省と文部省がもっと協力して、「性や健康に関する教育」の推進をはかるべき。性教育の授業内容については現場の教師が工夫して行う自由裁量権を尊重しつつ、教師たちが十分な研究や研修をして性教育の質を高めることができるような予算を出してほしい。また、性と健康に関連する施策や指針を決める際には、男性の声中心に決めることなく、多くの女性を登用してもっと女性の声を反映させることを要望したい。

２．村瀬幸浩さんに聞く

村瀬幸浩さんは和光高等学校保健体育科教諭を経て、現在、一橋大学、津田塾大学講師として「セクソロジー」を担当。その他にも多くの大学・短大において集中講義や特別講義を行い、セクシュアリティや性教育についての講演で全国を回る。「“人間と性”教育研究協議会」代表幹事。著書に『ニュー・セクソロジーノート』（東山書房）『男性解体新書』（大修館書店）『恋人とつくる時間』（ＫＫロングセラーズ）などがある。

（１）性教育と避妊

高校の性教育のなかでは避妊についてたいてい扱っており、主には保健体育で取り上げる場合が多い。家庭科の教科書に入ってる場合も少ないがある。避妊の学習は、さまざまな方法と注意点を説明し、熱心な先生は実際にコンドームの装着をやってみせるという形で行われている。ピルに関しては現場の教師に賛否両論ある。一つの避妊の選択肢としては良いが、「副作用が心配」「女性だけが避妊の負担を負うのが疑問」「月経周期が不安定な１０代が使っても大丈夫なのか」「高校生が使うのはどうか」「ステディな関係ではないのに使ってしまうのが心配」という声がある。

いずれにせよほとんどの場合、性教育では避妊の方法と注意点を羅列して教えているだけにとどまり、それが実際の場面で使えていないことが多いのが問題だ。養護教諭に聞くと、妊娠の不安で生徒が相談してきたときに、避妊しているかどうか聞くと、「避妊していない」というケースが圧倒的に多いという。全体の人工妊娠中絶の数は減少していても１０代や２０代前半では増えている。そのなかには避妊の知識が不十分というケースもあるが、知識はあっても有効に実行できないというケースも多いのではないか。

それは日本の性教育の持つ大きな問題とも関わっている。つまり大部分の性教育が生理学や医学、保健学的な見地からの知識を教えることに終始していて、社会学や女性学、ジェンダーの観点から扱うことがない。つまり、人間関係の問題として性や避妊がとらえられていない。そのため、実際にセックスをする場面になったときに、避妊を言い出せない、主体性をもって相手に要求できない、ということになってしまう。これはＨＩＶ・エイズの問題でも共通しており、感染防止のために「コンドームを使って」と相手に言えない人

が多い。

とくに女性に多いのが「相手に不快に思われたくない」「自分が相手にとっていい子でありたい」という「いい子症候群」。大学で性教育の講義をしていると、レポートに、「つきあって１年になるが、デートのたびに彼が求めてくる。応じているが私はちっとも楽しくありません。なぜでしょうか。」と書いてくる女子学生がいる。また、エイズや妊娠の心配があっても、「コンドームを使ってといいにくい」ということに「自分もそうだ」と同意する学生が多い。

これは１０代だけではなく、大人にも共通しており、夫婦間強姦の問題にもつながっている。夫の一方的なセックスに辟易している、こんな性関係なら離婚したい、という妻の声をよくきく。生活上の他の場面では対等になっていても、性の部分では対等でない、オープンに話せないというカップルは少なくない。思春期の頃から、知識だけではなく、性行為の主体者としての意識をどう育てるかということが必要だ。

（２）性教育とエイズ

最近、エイズの検査を受ける人が減ってきていて、ピーク時の半分くらいだといわれている。薬害エイズ問題の報道が峠を越して、関心が下がってきている。これは学校教育においても同じである。これまでは、「ジョナサン君」や「川田君」の話からエイズを語ればよかったのが、エイズはすでに性感染が主流になっているので、セックスをぬきにしては語れない。そのとたんに扱えなくなってしまった学校が少なくない。ある小学校では、３年前の６年生に聞くと、ほとんどみなエイズのことを知っていたのに、現在の６年生では、半分以下に減ってしまったという。エイズの感染者・患者は増加し続けており、これからますます性教育の必要性が増すと思われる。

しかし、避妊教育と同様、エイズ教育も国の取り組みが弱い。厚生省では保健所を通じて学校にパンフレットを配ったり、講演会を開催するなど、比較的積極的だが、文部省は学校の性教育で「性交」を扱うことに基本的にネガテイブである。いまや「性交」を扱うことなしにエイズ予防は語れない。そのために個々の学校や教師が熱心に取り組んでいる学校とそうでない学校で大きな差があるのが現状だ。

（３）若者からの性教育のニーズ

性教育の講座を共学大学で持っているが、４００名しか入れない教室に６１０名が授業をとっており、来年度から前期・後期と分けて行うことになったくらい関心がつよい。ここでは男子学生が７割。授業を聞いての感想を聞くと、「物の考え方が変わった」という声が多い。たとえば、「セックスは生殖のためには欠かせない行為だが、人間は生殖のためだけにセックスするわけではない。触れ合う安心感とか心地よさ、快楽もセックスの大きな要素。だから同性愛もありうるし、老人の性や障害者の性も考えていくことができる」「妊娠や出産、中絶は女性の問題だと考えがちだが、女性が妊娠可能なのは、初潮から閉経の５０歳前後までなのに対して、男性は６０歳でも７０歳でも相手を妊娠させる可能性がある。だから、男性のほうが妊娠に関わる期間は長く、避妊などの責任を果たさなければならない期間も長い」…等の説明を聞いて、「発想が変わった」「面白い」という

感想が多い。

レイプに関しても、これまでアダルトビデオ情報がインプットされていて、レイプのことを、「ちょっと荒っぽいセックス」程度にしか考えていなかった男子学生たちが、「合意のないセックスはレイプであり、暴力や強制が少しでも伴ったらそれは限りなくレイプに近づく」というと、「自分がいままでしてきたセックスのなかにはレイプといわざるを得ないものがあった」と振り返るなど、性意識を変化させている。

１０代をはじめ、若者はポルノや風俗的な性情報だけでない、正しい性情報を得たいという要求を持っている。ひとりよがりなセックスや暴力的なセックスでなく、人間として相互の全面的な合意と信頼関係に基づいたエロス・コミュニケーションとしての性関係を持ちたいという願いも持っている。性教育を通じて、それまで圧倒的に多くインプットされていた風俗的な性情報ではないまっとうな性情報を得ることによって、まわり道のようではあるが、「性が相手の人格や人生と関わること」という性意識が育っていき、そのような意識こそが避妊やエイズ予防への動機づけや実行へとつながると思う。

（４）性の自己決定力を育てる教育とサポートシステム

性教育の基本は、子どもが性の主体者であり、性の自己決定力を育てるということである。しかし現状では、トラブルを避けるためとか、危ないものに近づくな、という禁止抑圧のメッセージのみによって行われている性教育が少なくない。避妊にしても、「トラブルに巻き込まれないため」のものとして扱うのではなく、避妊を通じていい関係をつくっていく、人生を前向きに生きることに避妊を位置づけていく、ということが大切だ。　自己決定権という言葉は日本では新しい概念であり、まだ定着していない。性の自己決定権を行使するには自己決定力が育っていなければできない。自己決定力に必要なのは、①予知力と②交渉力である。予知力とは、こうしたらどうなるかをただしく予測する力で、科学的な知識と社会学的な洞察力の両方が必要になる。例えば、避妊しないで望まない妊娠をしたらどうなるのか。中絶する場合、または産んで育てる場合にどのような対応をしなければならないか。自分の心や体へ影響、相手との関係、学校や仕事との関係などを総合的に考えて、自己決定につなげていく力になる。また、「援助交際」や「買春」に関して、「お金をもらうセックスとはどういうことなのか」と考える。お金を与える側ともらう側に対等な関係はありえず、暴力や凌辱や望まない妊娠などの危険と背中合わせだということを認識し、そのことが自分の心や体や、人間関係を築くうえでどういう影響があるのかを予知していく、という力である。

交渉力とは、相手に対して自分の考えや要望を表現し、相手と話し合いながら、納得できる一致点をみつけていく力だ。例えば避妊やエイズ予防の際にこの力が必要になる。相手を傷つけずに自分の意見を通していくスキルを。ロールプレイなどを行いながらトレーニングしていくことが必要である。

避妊について、相手に言えないという心理の背景にあるのは「よく思われたい」という「いい子症候群」だが、これは自己肯定力の低さを示してもいる。自分らしくあることが良いことだという自分の性や体に対する自己肯定的な価値観や感覚がしっかりと養われていないとこのようになりがちだ。自己肯定力が欠けていることは、現在の日本の子どもた

ちの一番深刻な問題ではないか。知識よりこのことが行動力の原点であり、予知力、交渉力とともに自己肯定力を育てることが教育のなかで今後ますます重要であろう。そのような教育が学校で行われるシステムはもちろん必要だが、家庭においてもそういった意識を育てることが重要である。

また、自己決定のためにはそれをサポートするシステムが不可欠だ。日本の場合、性に関する悩みや心配について相談したり情報、サービスを受けられる場所がほとんどなく、社会的なフォローが欠如していることが大きな問題だ。このため望まない妊娠や性暴力などの悲劇が深刻になってしまう。家庭や学校以外で、プライバシーがきちんと守られて個別に相談できる第三者機関がたくさん必要だ。最近、カウンセリング機関は増えているが、性や避妊、リプロダクティブ・ヘルス＆ライツに関して正しい知識を持っていたり、トレーニングを受けているカウンセラーはほとんどいない。ちゃんと相談を受けることのできる専門家の養成やネットワークづくりが重要であろう。

Ⅳ　まとめ

「若者の避妊の選択肢とその情報源について」の研究調査を行った結果、次のようなことが明らかになった。

1．若者が避妊に関する情報を得るのは、①雑誌、②学校の性教育、③友人、が主な手段である。

2．雑誌による避妊情報は量も少なく、不定期で不正確な情報も少なくない。また友人による口コミ情報は雑誌や漫画やアダルトビデオなどによるものであり、ますます誤った情報を持つ可能性がある。

3．学校の性教育では、避妊がしっかりと扱われればかなり正確な情報を得る機会になりうるが、すべての学校が行っているわけではないので、学校で避妊情報が得られるかどうかは保障の限りではない。また、現場の教師には避妊に関する最新の十分な情報が流れていない場合が多い。

4．「膣外射精」が効果の低い避妊法だと知っていても実行するカップルが少なくないように、避妊の知識があっても実行にはまた別の要素が関わってくる。

5．避妊の実行に必要なのは、自分の性と体の自己決定力を持つことであり、男女が対等な関係を持ち、十分なコミュニケーションがとれることが重要である。

6．過去に習った避妊知識があっても、実際にそれが必要になる時点において性や避妊について相談したり、情報・サービスの提供を受けることができないと、決定的に若者のリプロダクティブ・ヘルスの状況を悪くする。

ここから引き出される提言は次のようなものである。

1．低用量ピルの認可も含めて避妊の選択肢を増やし、避妊情報をよりオープンにより多く出していくことが大切である。行政がもっとマスメディアに働きかけて正しい情報を流し、間違った情報を駆逐していくことが必要。

2．学校で避妊教育やエイズ・ＳＴＤ教育を含めた性教育がもっと活発に行われるよう、文部省と厚生省が協力しあう体制をつくることが必要である。性教育を行う現場の教師にも情報提供していくことが重要。

3．避妊を含めた性教育は単に知識を与えるだけでなく、男女の対等な関係・コミュニケーションとしての性を考え、性の主体者として自己決定できる力をどう育てるかという視点を持つことが不可欠。とくに女性のエンパワーメントと男性への性教育が重要。

4．性や避妊についての相談をしたり、情報・サービスの提供を受けられるクリニックやセンターが行政、ＮＧＯの両方で各地に必要だ。若者が行きやすいような場所や雰囲気であることが大切。専門スタッフを養成していく必要もある。こういったことに予算措置をとるべきである。

＜アンケート用紙全文＞

［基本事項］

1あなたの年齢は（　　）歳）（　　）か月

2性別は　男・女

3暮らし方は　①一人暮らし　②寮　③家族と同居

［避妊に関する質問］

＊質問は男女共通のものです。例えば男性が使う避妊法、女性が使う避妊法がありますが、どちらも「自分たちが使うもの」として男女ともに答えてください。

1あなたの知っている「避妊法」に、すべてマルをつけてください。

①基礎体温を測って妊娠しやすい日、すべてにマルを推測する方法

②月経周期から妊娠しやすい日、しにくい日を推測する方法

③おりもの（頸管粘液）の変化から妊娠しやすい日、しにくい日を推測する方法

④コンドーム

⑤ペッサリー

⑥殺精子剤　aゼリー　bフィルム（マイルーラなど）　c錠剤

⑦ピル

⑧ＩＵＤ（リングなど子宮内避妊器具）

⑨膣外射精

⑩その他（　　）

2あなたはセックスの経験がありますか？

①ある　（何歳から？　　歳）　②ない

＊ここから問13までは問2で①の人にお聞きします。②の人は問14へ

3あなたは避妊を実行したことがありますか？

①現在している　②過去にしたことがある　③ない

4避妊経験のある人にお聞きします。主に用いる避妊法はなんですか？　あてはまるものに丸をつけてください（複数回答）

①基礎体温を測って妊娠しやすい日、しにくい日を推測する方法

②月経周期から妊娠しやすい日、しにくい日を推測する方法

③おりもの（頸管粘液）の変化から妊娠しやすい日、しにくい日を推測する方法

④コンドーム

⑤ペッサリー

⑥殺精子剤　aゼリー　bフィルム（マイルーラなど）　c錠剤

⑦ピル

⑧ＩＵＤ（リングなど子宮内避妊器具）

⑨膣外射精

⑩その他（　　）

5避妊はセックスする際には必ず実行していますか？

①はい　②したりしなかったり　③その他（　　）

6避妊したくてもできない場合はどのような心理や状況、相手との関係が原因になってい

ると思いますか？　思うことを書いてください。
7 避妊の費用は主にどなたが負担していますか？
①自分　　②相手　　③二人半々くらい　　④その他（　　）
8 避妊に関して相手と話し合うなど、十分にコミュニケーションがとれていると思いますか？　　①はい　　②いいえ
　その理由は？（　　）
9 コンドームを使っている人にお聞きします。どのように用いていますか？
①セックスの際には必ず使う。
②使ったり使わなかったりする。
　その状況をａｂｃから選んでください。
　ａ危険日たけ使い、安全日と思う日は使わない
　ｂなんとなくくそのときの状況や気分で使ったり使わなかったりする
10 コンドームを使う理由は何ですか？　あてはまるもののすべてにマルをつけてください。①簡単な買えるから　　②使いやすい　　③体に害がないから　　④確実だから
⑤エイズやＳＴＤの予防のために　⑥その他（　　）
11 コンドームが破損したり、誤った使い方をしたりした経験がありますか？　ある人はそれについて書いてください。
12 膣外射精を用いている人にお聞きします。用いる理由を書いてください。例：コンドームをつけるのが嫌い、避妊器具がなにもないとき、失敗しない自信があるｅｔｃ．
13 膣外射精で避妊に失敗して妊娠に至った経験がありますか？　あるいは、失敗しそうになったことはありますか？　ある人はそれについて書いてください。
＊ここからは全員にお聞きします。
14 膣外射精は多くの若い人が用いています。しかし理論的にも実際にも避妊効果が低いため、避妊法とは呼べないことを知っていましたか？
①はい　　②知らなかった
15 膣外射精を避妊法として知ったのはどこからですか？　思いつくものすべてをあげてください。
例：雑誌、漫画、ポルノビデオ、友人、ｅｔｃ．
16 避妊に関する情報はどこから得ていますか？　主なものを書いてください。
17 現在、避妊目的に用いる低用量ピルが認可目前ですが、このことを知っていますか？
①知っている　　②知らない
18［問 17］で①と答えた人に。今後、低用量ピルが認可されたら、あなたは使いたいと思いますか？　　①使う　　②使わない
その理由は？（　　）
19 現在日本では、避妊や人工中絶に関しての正しい情報を得たり、相談できる場所があまりありません。そういった場所はもっと必要だと思いますか？
①必要　　②必要ない
その理由は？（　　）
20 避妊に関する社会環境や政策、サービスなどについて望むことがあれば書いて下さい。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約

日本では避妊の選択肢や情報・サービスの場が少なく、正しい避妊情報を得る機会が少ないといわれてきた。避妊の知識や実行が不十分であれば、当然その結果は「望まない妊娠」や「望まない出産」、「人工妊娠中絶」につながる。これはリプロダクティブ・ヘルスのうえで大きな問題である。

研究では、まず大学生にアンケート調査を実施し、若者たちがどこから避妊の情報を得て、どのように避妊を実行しているのかを調べ、その問題点を探った。その結果わかったことは、避妊の情報源の第一位は雑誌、第二位は学校教育、第三位は友人から、というものであった。そこで、第一位の雑誌の避妊情報の内容について調べた。また、学校教育における避妊の扱いについて性教育の専門家にヒヤリングを行った。

調査の結果、若者が得ている避妊の情報量は少なく、不正確だったり間違った情報も多く、正しい情報へアクセスする権利が保障されていないことがわかった。また、避妊の実行には避妊方法の知識だけでなく、男女の対等な人間関係や十分なコミュニケーションが必要である。避妊を含む性の自己決定力を育てるにはどうしたらいいのか、そのためにはどんな対策が必要なのかを考察した。